

1 単元名

「声に出して楽しもう」古典の世界（二）

2 単元目標

（１）親しみやすい漢文を音読するなどして、言葉の響きやリズムに親しんでいる。

【知識・技能】

（２）古人の考え方や物の見方にふれ、自分の考えと比べて考えを深めることができる。

【思考・判断・表現】

3 目標項目との関連

「書く」ステージ5

b「内容に見合った語彙や表現や文体を使って作文を書く。」

4 児童生徒の実態について

本学級は、男子6名、女子7名の合計13名である。国際結婚家庭が約6割と、中国にルーツを持つ多数の児童が在籍している。家庭では主に中国語を使用している児童が多いため、文法や語彙力など日本語の力において個人差が見られる。たとえば、「風が強い」ことを「風が大きい」、「電気をつける」ことを「電気を開ける」など、中国語に由来する誤った言葉づかいをする場面もよく見られる。

学級は全体的に学習に対して意欲的に取り組む児童が多い。特に、国語科の学習に積極的に取り組む姿勢が見られる。また、何事に対しても前向きに捉えて挑戦する雰囲気、友人の良さを認めて支え合う明るい雰囲気があふれている。

5 単元について

本単元では、親しみやすい漢文を音読するなどして、言葉の響きやリズムに親しむことをねらいとしている。「声に出して楽しもう」の学習は「我が国の言語文化に関する事項」の系列に対応している。第1・2学年には多くの昔話や神話・伝承に触れている。第3・4学年では短歌や俳句に触れており、第5学年では1学期に古文を学習している。様々な古典や文語文と出会い、それらを音読したり暗唱したりすることを通して、日本の伝統文化にさらに親しみ、知識と愛着を深めていくことができる。

本単元では、漢文を扱い、音読を通して響きや調子を味わうとともに、中国の古典を読む意義を感じさせる。これまで、俳句、短歌、古文の学習をしてきた。本単元では、日本の文化に大きな影響を与えた中国の古典の文章である漢文を取り上げる。本教材では日本人の生き方に大きな影響を与えている「論語」と日本人にもよく親しまれている漢詩の「春暁」を読む。書き下し文は、文語文と同じように読めるが、文語文より端的に、歯切れ良く感じられる。これが漢文特有の表現に結び付くこと、日本の古文との違いに着目させて、音読や暗唱をさせていく。

6 日本語支援について

日本語能力に課題のある児童に対しては、二つの手立てを考えている。

一つ目は、視覚的支援である。漢詩の原文と書き下し文を比較する場面では、電子黒板を用いて共通点や相違点を共有できるよう掲示を行う。また、「暁」などの情景を画像で見せるなど、イメージの共有を図るために視覚的にアプローチを行う。

二つ目は、教え合い・認め合いの場面設定である。児童同士での交流を通して、考えを言い表すことが難しい児童が表現につながるキーワードを見つけられるように支援を行う。また、本単元では、日本語と中国語とを比較して共通点や相違点を探るため、中国ルーツの児童が活躍する場面設定をしやすい。語順や言葉の使い方など、日本語と中国語の違いは彼らにとって非常に身近な事柄であり、多くの気づきが期待できるためである。それらが、彼らの日本語の力の育成につながり、さらにその気づきを発信することで、それぞれの児童の理解が深まることができると考えられる。

7 単元構成（総時数2時間）

時数	【学習活動】	【ポイント】 ○表現支援の視点 ◆バイカルチュラルの視点	【備考】
第1時	「論語と春暁を音読して、中国の古典にふれよう。」 ●「論語」を音読して言い回しやリズムに親しむ。 ●現代語訳を読み、日本語と中国語の共通点・相違点（語順や言葉遣いなど）について考える。 ●論語の中で述べられている考え方について地理解を深め、自分の考えを交流する。	○電子黒板を用いた掲示により、原文と書き下し文の違いを捉える。 ◆語順や言葉遣いなど、日本語と中国語の共通点・相違点を身近な経験と関連付けて交流する。 ○交流を通し、配慮を要する児童が表現につながるキーワードを捉えられるように支援を行う。	
第2時	●「春暁」を音読し、漢詩の言い回しとリズムを味わう。 ●現代語訳を読み、日本語との共通点・相違点（語順や言葉遣いなど）について考える。 ●漢詩の情景を思い浮かべ、イメージを伝え合い、共有する。	○電子黒板を用いた掲示により、漢詩の原文を提示して児童の興味関心を高める。 ◆中国語の得意な児童には中国語で提示した漢詩を音読させる。	

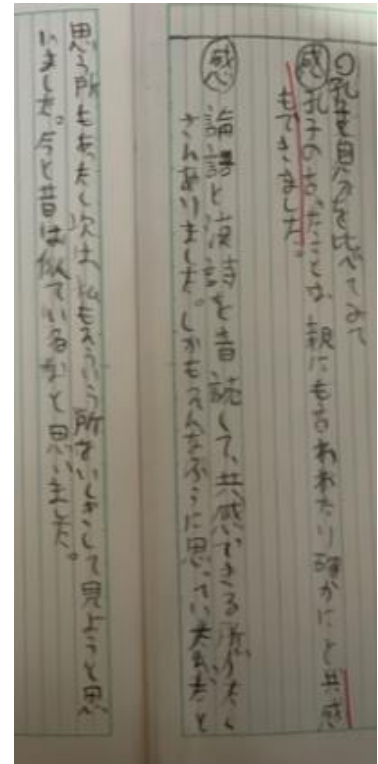
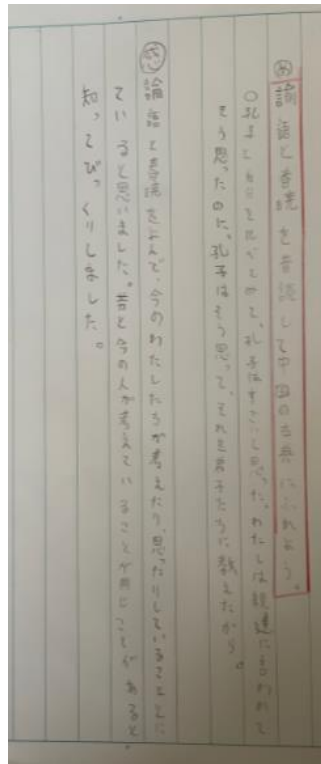
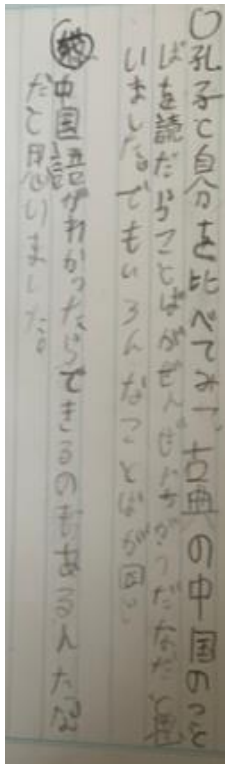
8 資料

春晓 孟浩然

春眠不觉晓，处处闻啼鸟。
夜来风雨声，花落知多少。

子曰：己所不欲，勿施于人。

子曰：“过而不改，是谓过矣。”



児童のノート

9 考察

【成果】

- 国際結婚家庭の児童にとって、日本語に対して苦手意識を持っている児童も多い。今回の学習は漢詩の学習だったため、導入の段階で書き下し文ではなく、原文を示したことで児童が興味関心を持つことができていた。国語が苦手でも中国語を話したり読んだりすることのできる児童が漢詩を意欲的に音読する姿はとても印象的だった。
- また、自分の考えを表現する場面では、友達の考えを取り入れたり、授業内で示した作者や情景をイメージできるような写真を示したりしたことで、児童それぞれが自分なりに考えたことを言葉で表現することができていた。
- ◆現地での幼稚園・小学校の経験がある児童など、中国ルーツの児童は取り上げた漢詩になじみが深く、初めてふれる児童へ知識を伝えるなど、活躍する様子が見られた。

【課題】

- 児童の興味関心を高めた導入をすることはできたが、考えを表現する場面で日本語が苦手な児童だけでなく、すべての児童が自分の考えを豊かに表現できるような手立てを準備することができていなかった。

本単元の学習活動は、学級の支援的風土が非常に効果的に活用できる実践となった。日本語での表現が難しい児童にとっては、児童同士の支援によって適切なキーワードを見つけ出し、表現活動の中で日本語の力を高めることができた。同時に、中国ルーツの児童がそれぞれの知識や経験を生かして活躍することにより、学級全体が理解を深めることができた。

支援的な風土を教育実践の中で生かすことにより、日本語の力を高めることだけでなく、自己肯定感を高めることや違いを受け入れて理解を深めることなど、バイカルチュラルの資質育成につなげていくことができると考えられる。